

5月15日(金曜日)「エリシャへ(2)水のいやし」

【新改訳 2017】

Ⅱ列王記 2・19－21

「エリシャは水の源のところに行って、塩をそこに投げ込んで言った。
『主はこう仰せられる。「わたしはこの水をいやした。ここからは、もう、
死も流産も起こらない。」』」(21節)

これは、記録されていることでエリシャの最初の奇跡的なわざでした。
この後、多少の例外はありますが、エリシャの働きの多くは思いやりの
あるものでした。

H・C ミアーズは言っています。—「エリシャの働きは 50 年間続いた。彼の奇跡の多くは親切とあわれみの行いだった。エリシャは当時の王たちに偉大な影響を与えた。彼は彼ら(王たち)の行いを認めなかったが、いつも彼らを救い出すためにやって来るのであった」(『旧約聖書の概説』)。

この時、町の人々はエリシャに、水が悪いので流産が多いと訴えたところ、水の源に塩(きよめの働きをする)を投げ込んでいやしたのです。
知恵と愛の伴った信仰のわざを、主が祝福してくださったのです。

～祈り～

主よ。人の悪や間違いに同意しなくとも、しかしその人の救いのために
祈り、愛と知恵のわざを行うことができるようにお助けください。

【学びのために】

「水の源に塩を投げ込んだ」とは、信仰の行為であったと同時に、知識
の伴った行為であったことに注意しましょう。「信仰」というと、非常識
や無知も意に介しないことと考えるのは正しくありません。